# STREET PEOPLE

ストリート・ピープル

高松英昭写真集

路上に生きる85人

太郎次郎社エディタス

いつも折り紙を折っている

「木の上にナタリー・ポートマンがいるのを見た」
と言っていた

日本版ウッドストックの開催が夢

# あとがき

高松英昭

路上で生きる人たちの撮影を始めて、十五年ほど経ちました。

凍死する路上生活者を撮影しようと深夜、吹雪のなかを歩きまわったこともあります。自殺できずに、路上にふたたび戻ってきた人にも会いました。何度も病院に保護されたのに、その都度、路上に逃げだしてしまう人もいます。撮影中に怒って、僕のことをボコボコに殴り倒したおっちゃんもいました。別の日にまた、そのおっちゃんに会うと、顔を腫らした僕の顔を見て、「どうした、大丈夫か?」と心配してくれました。本当に、憶えていないようです。怒りが泡ぶくのようにパチンと弾けて、とにかく笑ってしまいます。

河川敷に大きな家を建てて住んでいるおっちゃんの家でバーベキューをしたこともあります。そこから花火を一緒に眺めました。大晦日(おおみそか)、駅地下のダンボールハウスのなかで一緒に鍋をつつきながら、新年を迎えたこともありました。お正月になると自家製の松前漬けを分けてくれるおじいちゃんが公園に住んでいたけど、最後は病院のベットに体を縛りつけられたまま亡くなりました。

路上で多くの「ホームレス」の人たちと知りあい、友人もたくさんできました。おっちゃんたちとの時間を

重ねるごとに、写真家と被写体という関係はぐにゃりと柔らかいものになり、路上の世界が僕にとって生活の一部になっていきました。

路上は、引き潮の強い荒れた海のようです。

一度、足を入れると強い引き潮にひっぱられて、どんどん沖のほうに流されてしまいます。気づくと、いままでいた陸地が遠く彼方に見えます。必死に陸地に戻ろうとするけれど、なかなか陸地に戻れません。もがくほど、ひたすらに体力を奪われていきます。海面に浮かんでいると波が高くて溺れそうになります。

思いきって海中に潜ってみると、乱暴な波にもまれることもなく、陸地から見た海の風景とは違う、抗することができない波のうねりから解放された世界があります。ずっと、そこにいたいけど、そう息は長く続きません。定期的に、荒れた海面に顔を出すことになります。その都度、以前よりも遠く離れた陸地を見ることになります。深いため息と呼吸を同時にして、また溺れないように海中に潜っていきます。

路上に生きる人たちと一緒に海中に潜るような感覚で、路上の風景を撮影しようと考えました。

写真に登場する人たちは、雑誌『ビッグイシュー　日本版』の販売者さんたちです。「ホームレス」の人だけが路上で販売することができる雑誌で、自分で雑誌を仕入れて、それを路上で販売した売上金のなかから、生活に必要なものを購入したり、貯金をして、自分の力で自立を目指していきます。世間では「ホームレス」と呼ばれる人たちでもあります。

販売者さんたちは、それぞれの個性や経験を生かして雑誌を通行人に販売します。日々、同じ路上に立つこ

とで、販売者さんたちには多くの親しい知りあいができます。若い女性やサラリーマン、タクシーの運転手など、同じ路上を利用するさまざまな人たちです。女子高生の進学相談や恋の悩みまで相談にのったり、ティッシュを配る若者と世間話をしたり、雑誌を買ってくれる常連の女性客と結婚した販売者さんもいます。

同じように「ホームレス」と呼ばれるたくさんの人たちが、路上で生活しています。けれど、「ビッグイシュー」の販売者さんのように通行人と仲良くなって、日々の世間話をするようなことはあまりありません。雑誌を購入するというささやかな行為をきっかけに、販売者さんたちは通行人を、大波がうねる海面から穏やかな海中へと連れていき、陸地から見る風景とは違う海の世界を見せてくれるのかもしれません。

海面も海中も、同じ現実の世界です。ただ、「ホームレス」という言葉に足元を縛られると、陸地から海面を見ることしかできません。人間に対してつけられる安易な呼称は、人間関係や目に映る風景を固定してしまうつまらない記号に過ぎません。

この写真集は「ホームレス」という言葉に足元を縛りつけられた人たちに対する挑戦です。臆することなく、カメラの前に立つ路上に生きる人たちの姿は、「ホームレス」というレッテルに抗(あらが)おうとする覚悟でもあります。僕の「挑戦」と彼らの「覚悟」が、足元を縛りつける「ホームレス」という鎖を腐解させ、路上に生きる人びとへのイメージを自由に解放していくことを願っています。

写真に登場する人たちは、どこかぎこちなく不自然なポーズだったりもします。写真に撮られることを意識してもらうために、ポーズから指先の位置まで、ファインダーを覗きながら入念に指示を出しました。それで

も、ちょっとした体の角度や視線、指先の微細な動きに彼らの個性や性格が出てきます。ちょっとヘンテコなファッション写真のようなイメージです。撮られることを意識した不自然な姿のほうが、写真を撮る人と撮られる人、また、僕と彼らの友だち同士としての関係を自然に表してくれると思いました。だから、この作品は、被写体となってくれた方々との共同作業というプロセスがあって、完成させることができました。

撮影はすべて路上です。たまに、ガードマンに怒られたり、ビルの壁にケント紙を貼りつけたりもしました。通行人の邪魔をしたこともあります。壁に書かれた落書きや店先のディスプレイも背景として使わせていただきました。路上にいるさまざまな人たちとの共同作業でもあると、勝手に思い込んでいます。

二十年来の友人である作家の星野智幸さんに、この写真集のために短編小説を書いていただきました。星野さんが描く路上の世界は、僕にとってはリアルな世界です。「若い女性と路上で生きる人たちが一緒に楽しめるような小説」という無理な注文にもかかわらず、快く応じていただき、僕の頼れる友だちであり、「先輩」です。

太郎次郎社エディタスの北山理子さんと出会わなければ、この写真集は生まれませんでした。僕の頭の中でミトコンドリアのように動きまわる妄想的世界を目に見える形にしてくれた編集者です。そして、装丁・デザインを担当してくださった新藤岳史さんは、無理な注文に見事に応えてくださいました。

「ビッグイシュー日本」の販売者、スタッフのみなさんには言葉にならないほど感謝してます。みんなが写真集を楽しそうに見ている姿をいつも想像していました。この写真集は「私たちの物語」です。

みなさん、そして僕の両親へ、「本当にありがとう」。